

## 日本と沖縄の神話（海神宮考）について

間 田 笑 子

「海上の道」に続く「海神宮考」「みろくの船」「根の国の話」は柳田國男の面目躍如といった作品であると思う。というのは、この作品を読むにあたっては、「古事記」「日本書紀」などの豊富な知識が必要だからである。

今回私たちは、「根の国の話」「海神宮考」につづいて、「みろくの船」を読んだが、私にとっては、理解するというより、あらためてさまざまな知識を得たというものだったように思う。

それほどにこれらの本の中身は、濃く、豊富な知識の宝庫だった。

これらの本の内容を理解するためには、是非とも最少限の「古事記」の知識が必要である。そこで、泥縄式に「古事記」の訳本を読み、あたふたと一応のあらましを知ったというていたらくであった。

私は「海神宮考」という表題を見て、これは単なる「竜宮城」の話ではないかと思っていた。つまり、「浦島太郎」や、「海幸山幸」など、幼いときに聞いたおとぎ話である。

私が小学生の頃は、まだ世の中は貧しく、本を買うのもなかなかの時代だった。そのころ、一ヶ月に一冊の本を買って貰うのが、私の大きな楽しみのひとつだった。それらの本の中に「にほんのむかしばなし」(?)というのがあり、今もその装丁や挿絵を覚えているが、最初の方の話に「浦の島子」(確かではないが)というのがあった。

その時、「これは浦島太郎の話なのに、何で島子なんだろう」と思ったのだが、それは「日本紀」からの話で、その本には、ほかに「今昔物語」「雨月物語」など日本の代表的な話が載っていたのであった。

今回「海神宮考」の中に「浦の島子」という言葉が出てきたときは、「ああ、これだ」と妙な納得をした。と同時に、柳田の博識にあらためて驚いてしまった。

閑話休題。

「根の国」とは何だろう。「古事記」など読み慣れている人には当たり前の言葉であったかもしれないが、私が知っていた「黄泉の国」や「常世の国」や「竜宮城」とは違った言葉に、いささかたじろいでした。もともと私がもっていた「黄泉の国」のイメージはいわゆる地獄絵にみられるような、恐ろしい、身の毛もよだつようなところであった。ところが、「古事記」で最初に「根の国」という言葉が出てくるのは、スサノオノミコトが母のいる「根の堅洲國」へ行きたいと駄々をこねるところである。その前はイザナギノミコトがイザナミノミコト恋しさに「黄泉の国」へ訪ねて行ったとある。そうして二人とも「黄泉比良坂」よもつひらさかを通してこの世に帰ってきている。こうしてみると、「根の国」と「黄泉の国」は、この世と自由に往来の出来るところのように思える。しかも、彼らはむなしくこの世に帰ってきたわけではない。

また、「海神宮考」についても、同じことがいえる。

オオクニヌシノミコトが「根の国」を訪ねて、スセリヒメと、のりこと大刀、弓矢、天の詔琴しあみつたまを手に入れたと同じように、山幸彦は海神から豊玉姫と二つの玉しあふるたま(塩盈珠、塩乾珠)を貰って帰っている。このことから「海神宮」はたんに海の底にあるのではなく、「海坂」をこえた海底にある国であると考えられる。また、同様に「根の国」も海底の国である

と考えられる。それは、大祓の儀式のさい、国中の罪が川から海に放たれ、さらに「根の国・底の国」に祓いやられるという行事があったということでもわかる。(西郷信綱著「黄泉の国と根の国」1975.5 平凡社『古代人と夢』所収)つまり大地には根があり、その根はずっと海の底まで伸びているということであろう。

もともと日本人が抱く「根の国」像は、地下ではなく、もっと安らかな、この世の人が往ったり来たり出来ると考えられた第二の世界であったようだ。

「根」とは、本来、出発点、中心点ともいうべきものであったらしい。ところが、いつの間にか「根」すなわち「地下」という観念に変わっていった。これはまだ文字を持たない日本人が、語感の似た「根」という漢字をこれにあてはめた結果、地下という暗いイメージが生まれてきたらしい。このような言葉は他にも多々あるようで、すっかり元来の意味を失っている言葉もあるようだ。したがって、「根の国」をあらわすのに、手近にあった「黄泉」という字を安易に使ってしまい、その結果、地下に人の魂が入っていくような印象を与えてしまった。このことについて、柳田國男先生はずいぶん憤慨していられるようだ。

こういった曖昧さが日本人らしいといえ、そう言えそうだが、沖縄にもこのような「根の国」に似た考え方があると柳田先生はいつている。それは「ニライ・カナイ」の信仰である。「ニライ・カナイ」とは日本でいうところの「根の国」である。

彼は「ニライ・カナイ」(あるいは「ニルヤ」ともいう)を単に沖縄だけの世界観ではなく、日本本土にも存在したことを示し、そのことから日本人が沖縄からやってきたという彼の持論を証明しようとした。

沖縄の「ニライ・カナイ」は海の彼方にある理想郷であり、彼の言葉によれば、「清い靈魂の行き交う國、セヂ(ニライの力)の豊かに盈ち溢れて、惜しみなくこれを人間に<sup>つた</sup>らんとする國」である。「日本書紀」や「古事記」に登場する「根の国・常世の郷」は本来同じであるといっているのだ。

「ニライ」の「ニ」が、「根の国」の「ネ」と通い合うものであるとは、柳田先生の指摘であるが、彼はいろいろな例をあげてそれを証明しようとしている。そういえば、沖縄には「ア」「イ」「ウ」の三つの母音しかないということ、司馬遼太郎先生が『街道を行く』のなかで述べている。「ニ」が「ネ」に変化するの当然かも知れない。

では、沖縄ではなぜ海の彼方にある見ぬ国を「ニライ・カナイ」だと考え始めたのであろうか。

第一には「火」である。東の地平線から昇る太陽への畏敬の念から、火の管理者を「テダ」(太陽)とたたえ、ひいては個々の村の按司、世の主、後には国王までを「テダ」とたたえていたようだ。

第二には「稲の種」である。稲の種については、島の元祖が天の神に教えられて、ニラ(竜宮)へ行って稲種を求めたということになっている。

いずれも「ニライ・カナイ」より下されたもので、人の生活にはなくてはならないものである。しかもそれを手中に入れた者が国の長となっている。

日本の「古事記」においても、スサノオノミコトが「根の国」から持ち帰ったものに国を治める象徴となるものがあつた。その他「動物報恩型」「花売柴刈型」「海彦山彦型」など、日本と沖縄には共通する話は多くある。このように、日本と沖縄の語り伝えが似

通っていることから、柳田先生はますます日本人の起源を、沖縄にもとめていられるようだ。

だが、このような言い伝えは世界各地にみられる。ギリシャ神話の中で、オルフェウスが妻をもとめて死者の世界に行くという話などは、イザナギノミコトが黄泉の国へ行く場面と似通っているではないか。

そこで、「古事記」と共通する世界の神話を調べてみた。

すると、東北アジア、および東南アジアの神話や民話が、あまりにも日本の神話や民話によく似ていることに気がついた。稲作との関わりも、東南アジアとそっくりである。また、「國譲り」や「天孫降臨」などは東北アジアとの類似が目立つ。

このことは非常におもしろい発見であった。どこにいても、どんな生活をしていても、人間の考えることはみな同じであるようだ。

そして、人々の信仰や考え方に共通性があるのは、人類が発展していく過程では当然のことではないだろうかとも思った。

また、沖縄で初めて稲作が開始されたのは、グスク時代だとのことである。グスク時代前の沖縄を貝塚時代後期とよぶが、その時代の沖縄の人々は九州としきりに交易をしていて、かなりの数の弥生式土器が九州から沖縄に持ち込まれているのに、水田跡も炭素米、石包丁等の農具が全くみられないという。沖縄で稲作の跡がみられるのは、十三世紀のグスク時代である。グスクの跡からは炭素米、麦、馬、牛の骨が出土している。

おまけに沖縄には古い記録が無い。唯一記録として残されているのは、中世に編纂された「おもろ草紙」である。その他には、古老の口承や、信仰によるさまざまな伝統の行事があるばかりである。

このように沖縄に関するいろいろな本を読んでいくうちに、私自身は沖縄と日本を結びつけることに混乱をきたしてしまった。このまま柳田説を信じていいものだろうか？私などが、少しばかりの資料を読んだからといって、柳田説を否定できるものだろうか？

こんな事を考えていたある朝、新聞に目を通していた私は、文化欄の紙面に目がとまった。それは陳舜臣氏の「六甲隨筆」の中にある次の一文である。

「(前略)今年の夏に、その宮古島を訪ねて、台風十三号に遭い、一日足止めされた。なんともすさまじい台風である。白波の怒濤どころか、海ぜんたいが盛り上がってくるのだ。これでは三千年前に、なにかの証拠を残すというのは難しい。(中略)証拠がないのは、その事実が無いことを物語るものではあるまい。」

この陳舜臣氏の一文は、見事に民俗学の本質を言い当てている。民俗学は、ある種の感覚で成り立っている場合が多いように思う。実際に沖縄の山や海をみて、沖縄の空気に肌で触れて、その土地の人々と会って話をして、初めて何かを感じるのかもかもしれない。

前回の「海上の道」で知った柳田先生の信条に、次のような言葉があったのを思い出す。

**「たくさんの無形の記録を保管している人々に対して常に教えを受ける者の態度を失わず、まさに文字通りの同情をもってこれに臨むこと」**

だから、「海神宮考」の中のこのくだりが私の胸を打つのである。

**「民族学がもしも多くの生活群の比較の上に立つ学問であるならば、たんなる保存せられたものの尊重という以上に、出来る限りそれが今ある形にまで到達した道程または順序を尋ね**

究むべきは当然であろう。」

柳田先生はほんの少し身近になったが、沖縄は、私にはまだ限りなく遠い存在のようだ。

平成十六年九月

秋風の立つ頃

参考文献

西郷 信綱	「黄泉の国と根の国」	平凡社『古代人と夢』	1975年
田辺 聖子	「田辺聖子の古事記」	集英社	1986年
福田アジオ	「柳田國男全集1」	筑摩書房	1989年
武光 誠	「日本誕生」	文藝春秋社	1991年
山田 仁史	「古事記・記紀神話と日本の黎明」	学習研究社	2002年
陳 舜臣	「六甲隨筆」	朝日新聞	2004年